虚空の揺籃～暁の目覚め～

蒼月 かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虚空の揺籃～暁の目覚め～

【Ｎコード】
Ｎ９３６０Ｎ

【作者名】
蒼月　かなた

【あらすじ】
ここと は違う世界……『天涯の果て』へと向かう天翔船。国家の威信をかけたその旅立ちを人々は歓声をもって見守った……。その日、一つの王国が滅んだ。――３００年後……新たに生まれた王国でもつれた糸が新たな物語を紡ぎ始める。

序章（前書き）

＊将来的に多少の流血、残酷表現が入る予定です苦手な方はご遠慮ください＊

序章

空に轟音が響きわたる。
鼓膜を揺さぶるその音はよく聞けば人々の歓声だった。
今日この日に、まさに相応しい雲ひとつない空。
そこに陽光の祝福を受け燦然と輝く一艘の天翔船が行く。

移動要塞ルーヴェルガ

魔術師達によって発見されたこの世界とは別の世界「天涯の果て」へと向かう船だ。
その船を見守る人々の歓声に混じって呼ばれる名がある。

希代の魔術師であり第３王女のリルアーナ
その夫で護衛騎士団長でもあるルドヴェイン
２人は「天涯の果て」が発見されたと同時に婚約、先日結婚式を挙げたばかりだ。
その感動的な姿は国民の目にまだ焼き付いている。
そして、魔術師達を総括するリルアーナ姫を補佐するウルデューク卿

幼馴染にして堅い絆で結ばれた３人はルーヴェルガに乗って、２００人の魔術師と８３６人の作業者と使用人を率いながら帰れるともわからない異空へ旅立って行くのだ。その雄々しい旅立ちの姿は王国に残された魔術師達によって誇らしげに巨大な水晶壁へと映し出されていた。

ルーヴェルガの船主にちらちらと光が集まりつつあった。
リルアーナ姫をはじめとする魔術師達が異空の扉を開くための詠唱に入ったのだ。

光はやがて収束した後一気に広がり巨大な魔方陣を天空に描いていた。
知らず知らずのうちに歓声は収まり固唾を飲んで見守る人々の姿がそこにはあった。
移動を主とする魔方陣でこの瞬間が一番事故が起こりやすいからだ。

光が

魔方陣の中央にまるで扉を開くように亀裂が入った。

光が

魔方陣を介して溢れた光が天翔船を白く染める。

割れるような歓声が戻ってきていた。異界への扉が今、開かれたのだ。
今日この日には隣国からの大使も多い。
この大陸きっての魔術師大国としての誇りを果たした瞬間であった。
天翔船は威風堂々たる様子でゆっくりとその扉に向かって行く。
船主が異空への扉に差し掛かった時だった……。

魔方陣が昏く明滅する。

一瞬にして浸食される。

それは異常な光景だった。何千人もの魔術師の力を総動員して天空に描いた魔方陣。
それが一瞬にして書き換えられるなど、人のできる業ではない。
歓声はどよめきに変わりやがてそこかしこから悲鳴が上がった。
扉から現出して来たノハ

黒い　闇
ドロリトシタソレハ
赤子の手　に
ミエタ

その赤子の手を模した醜悪なソレは天翔船をひと掴みにして、ずるりと音を立てると
扉の奥へと姿を消した。
無理やり現出したであろうソレに魔方陣が耐えられるはずもなく昏い光を放って消滅する。
扉の奥に戻りきれず切り離された闇はそのまま王国へと落下した。

その日、大陸随一の魔術国家であるヴァレイシア王国は壊滅的な被害を受けて事実上滅んだ。
生き残った第２王子に率いられた少数の民は北の地に移り小さな王国を築いた。
長く、隣国への補償の対応に追われたその国は、救出のための天翔船を出すことは遂になかった。
世界に名だたる四方の賢者に止められたとも、あまりの惨事を引き起こした『闇の手』に怖れをなしたとも囁かれたが定かではない。
ただ、世界中の国王が集まった会議で一つの事が決められた。異界を渡る扉を開く術を禁術としたことだ。今まで、異界を渡る扉を開けた者がいなかったわけではない。しかし『闇の手』が何を原因としてこの世界に現出したのかわからない以上、異界との接触を一切断つのが一番であるとの決定が下ったのだ。それほどまでに失われた命は多く、その様も凄惨を極めていたと言えよう。
北の地に王国を建てた第２王子はそのまま国王となり国の名前を新たにした。その名を

レーヴェンガルド

古代エムネア語で『天涯の楔』という意味である。

もつれた糸の先～始まり～

廃墟となった建物を覆い尽くすように木々が青々とした葉を茂らせる。

――――そこは深い森だった。

陽の光も陰るそこを走る影がある。美しい少女だ。

薔薇色の頬が紅く色づき、額に掛る汗に濡れた蜂蜜色の髪も艶やかに……。

けれど、彼女が置かれた状況は決して穏やかなものではなかった。

軽装備とはいえ王国の鎧に身を包まれたその姿は髪が乱れ、転んだのか泥にまみれていた。

そして少女が高貴な身分であるとわかる刺繍の施された豪華な絹地は破れ、血に汚れている。

何よりも痛々しいのはその左手であった。

右腕で抑えているそれは肩のあたりが真っ赤に染まり、走るたびに力なく揺れている。

少女は固く唇を噛み締めると意志の強い藍色の瞳で前を睨みつけた。

追手の気配はない。けど、少女は油断なく進む。本営に戻る事はできない。

先程の混乱でもはやこの森の中、どちらの方角に行けば辿り着けるかわからないからだった。

――――どうしてこんなことに……。

少女の目に涙が滲む。

信頼していた。家族のように想っていた。皆と同じに大好きだった。

――――なのに。

前から、騙していたのだろうか……。
自分を。兄弟たちを。父上を？母上を？そして国民をも。
どこからが嘘でどこからが本当なのか、それすらもわからない混乱した思考でただ走り続けた。
でも、と思う。もしかしたら彼がおかしくなったのはこの森に来てからではなかったか。
ふとした瞬間に、ぼうっとすることが多くなった。
どうしたのかと聞くと少し疲れたみたいだ、と。
父上に与えられた期間は１カ月。少しでも滞在期間を延ばそうとここまで強行軍で来たのだから確かに疲れもするだろうと、そう納得してしまったが……本当にそうだったのだろうか。
思い出すのは微笑み。アレを見てしまった自分を咎めるわけでもなくただ、嬉しそうに微笑んで……
彼は自分に攻撃をしたのだ。繰り出された魔術は決して遊びで放たれた者ではなく、当たれば人など簡単に殺せる代物で……。どうやってそれから逃れられたのかは定かではない。ただ、日頃の訓練のお陰で身体が勝手に反応してくれたのだ。逃げる間際、足止めのために放った電撃が彼に直撃したのを見た。暫くは追ってこれないはずだった。それでも彼の放った衝撃派は自分の左肩を砕き愛用の杖もそこで取り落とさせるには十分だったけれど。

――――こんなことなら、姉上の言うことを聞いておけば良かったんだわ。

すぐ上の姉、グレイシアは今回の調査団の派遣に反対だった。３００年の月日が経っているとはいえこの場所は、不穏な噂が多すぎる。過去に二回ほど調査団が向かった時にも死人が出ているのだ。まして、夜になれば苦しみ蠢く人々の声がする、とかフワフワと浮かぶ人魂を見た、などの怪異譚にも事欠かないこの場所に妹が行く事を姉が心配するのはもっともだった。それを押して来たのは自分だ。

今回の調査団に加わりたいと。もともと３００年前の天翔船の事故の原因を研究している自分である。次の調査団が組まれるのは自分が生きているうちにあるかどうかもわからない――――そう強請って父上を説得したのはついこの前だ。思えば、自分が彼を巻き込んだのかも知れなかった。

――――わたくしが行く、と言わなければ……。

きっと彼はついて来なかっただろう。そう思うと余計に自分に腹が立つ。

ガクガクと笑う膝に足がもつれてそのまま身体がその場に崩れ落ちる。バランスをとれぬまま左肩から落ちてしまい激痛が全身を走った。あまりの事に息がとまる。動けるようになるまで暫くそのまま蹲り痛みによる吐き気を宥めて過ごした。落ち着いて来た所で止めていた息をそろそろと吐き出すと吸い込んだ空気は噎せ返るような腐葉土の香りがした。……これが現実であると言われた気がして意志を込めた瞳を前に向けると自然と右手の拳を握りしめる。

――――生きて帰らねば……。

生きて帰らねばならない義務がある。彼が、真実禁忌を犯そうと言うのであれば、自分がそれを国に報せねばならない。それにもしかしたら……彼を元に戻す術もあるかもしれない。あれは違う。きっと彼ではない。微笑みながら誰かを傷つけられる人ではないと自分は知っていたはずだ。

ふと、左に目をやると木々の隙間から巨大な尖塔が見えた。荒い呼吸を整えて立ち上がる。

古い地図に描かれていた王城の塔の一つだと思われた。あそこに行けば大まかな位置がわかる。

もし塔にのぼる事が出来れば本営の位置もわかる事だろう。そう考

えて一歩を踏み出した時だった。

大地が消えた。自分にはそう思えた。実際は空洞が落ちた枝と落ち葉によって隠されていただけなのだけれど。驚いた顔そのままに深い闇に――――堕ちた。

――――身体の感覚がない……。

耳は聞こえている。自分の荒い呼吸が聞こえる。でも、手も足も動かせる気がしなかった。落ちてきた場所からは木漏れ日に輝く梢が見える。かつては部屋であったのだろうそこは朽ちかけた石壁に囲まれていた。床には落ち葉と崩れた石が散乱している。奥の方は見えなかった。昏い闇がただそこに威圧感を持って存在していた。自分は何と運がないのか……。このままここで落ち葉に埋もれ朽ち果てていくのだろう。伝えなければならないのに。帰らなければならないのに。

喉の奥から……ごぽりと血がせり上がってくるのがわかった。肺をやられたのか――――痛みがないのが不思議だった。突然の事で身体が麻痺したのだろうか。

急に目の前がぼやけ始めて驚いた。ぽろぽろと涙が頬を伝う事で自分が泣いているのだと気がつく。

悔しいのか、哀しいのかそれとも国の行く末を憂いているのか……。ただ

――――どうして……どうしてっ……っどうしてっっ！！！……何故……？

という思いだけが心を荒れ狂う。暫くその嵐に心を委ねて声を殺してひとしきり泣くと少しだけ心が落ち着いた。まだできる事はあるかもしれない。何か国に報せを送る手段を考えなければならなかっ

た。残された時間の中で、できることを探さねば……。
ふと、気配を感じた。何者かがこちらを窺っている気配。不思議と恐怖は感じなかった。今、祖国の危機を誰にも報せる事が出来ないままに死ぬよりも怖い事などありはしないと血の気の失せた唇を開く。
「だ……れ……？」
声は信じられないほど弱々しく響き少女は顔を顰めて苦笑した。
「そこに、いる……でしょう」
意識しながら言葉を紡ぐ。肺をやられているせいか一言声を発するたびに酷く苦しく感じた。
『……』
答えは無い。
「お前が……、神、でも魔でも、構わない」
首を闇の奥へと向ける。
「わたくし、の身体も、魂もあげる、だから、わたくしの願い、を聞きなさい」
『……』
闇から、すらりと女の手が伸びてくる。しなやかで美しい手。その手は昏く闇色をしていた。
戸惑いが生まれる。それは３００年前の事故の原因と似通っていて……。でも超常の力を持つものであれば願いを聞き届けてくれるかもしれないという思いで言葉を絞り出す。
「願いを、聞いて……っ」
女の手は少しためらった後、少女の髪を整え優しく撫で続けた。それはまるで、母親が子供をあやすように……安心させるように。
何か声を聞いたような気がしたけれど少女にはもう分らなかった。
意識が完全に途切れるその瞬間まで少女は願いをうわ言のように囁き続けた。

もつれた糸の先～始まり～（後書き）

もつれた糸の先の話です。ここから新たな物語が始まります。
ネット投稿初作品で拙いトコロが満載ですがお付き合い頂ければ幸いです。

こぼれ落ちたもの

暗闇の中、一筋の光が少女を照らす。
泥と血は乾き、動かないその様はまるでボロボロになった人形のようだった。
風が崩れ落ちた大地の隙間から吹き込むと、寒かったのか少女は軽く身じろぎする。

生きていた。

よく見ればかすかに膨らみを帯びた胸も上下していて穏やかに呼吸をしている事が見て取れる。
その少女を見つめる目があった。男だ。苦悩と憎しみに彩られた双眸で闇の中から少女のその白く細い首に手を伸ばす。もう少しで手が届く、という所で男は手を止めた。すぐ近くで声がしたからであった。それは少女を呼ぶ声だ。何人もの人間が足音を響かせながらまっすぐにこちらへと向かって来る。

先程、魔術を使った轟音はたやすく彼らをアノ場所に誘った事であろう。あの場所自体にもう用はない。自分があの場に至った事でその役目を果たしたのだから。
ただ、彼らは見た事だろう。大地を染める血と落ちた杖。少女の身に何かあったと容易に知れるそれ。
愛している者を失うかも知れない彼らのその焦り。それは甘美に自分の胸を焦がし、うっとりとした昏い喜びを与えた。この手でその絶望を味あわせたい……けれど、残念ながら時間切れだった。少女の血の跡を追ってきたであろう者たちは今にも大地に空いた穴に辿り着くだろう。機会はまだあるはずだった。いつでも自分は少女の傍に行けるのだから。うっとり微笑むと、男は少女の頬をその手

でひと撫でして闇の中へと消えていった。

※　　※　　※

呼ばれた気がして重い瞼を開ける。それは意志の力を総動員してもかなりの重労働だった。

———ね……むい……。

身体に力が入らない。まるで、まるで自分の身体ではないみたいに。すぐ近くで誰かがホッと息を吐く音がした。顔は逆光で見えないけれど、鎧に身を纏った男であるのは理解できた。目を開けた私を見て何か言っている。言葉は聞こえているはずなのに頭の中で意味をなさずにただ流れていってしまった。やはり身体に力が入らない。ただひたすらに眠かった。ふと、見上げると天上に空いた穴の上に何人もの人がいた。こちらも逆光で顔が見えないが心配そうに覗き込んでいるとわかる。

———あそこから落ちたのか……。

身体の周囲に目を向ければ落ち葉の上に石も転がっている。不思議と身体は痛くなかった。あそこから落ちて無傷だなんて……なんて幸運だったんだろうと場違いな事を考える。それより、私が落ちたであろう穴の周りにあんなに人がいて大丈夫なのかしら、と思っていたら穴全体を淡い光が包んでいるのが目に入った。どうやら魔術で補強してあるようだ。すぐ横にいた男が上に向かって顔をあげた。

顔を上げる瞬間に初めて逆光ではない男の顔が見て取れた。男と言

うには少々若い、青年と言う位の歳だろう。精悍な顔立ちに夜を閉じ込めたような黒髪そして目の色は鷹のような黄金色をしていた。誰だろう？知らない人だ。今にも眠りに落ちそうな瞼を一生懸命開いて彼を見る。

「あな、た、は、だ……れ？」

唯一呟かれた言葉に、青年がぎょっとした顔で振り返る。
慌てた様子で何か言っているのは分かったのに、やはり言葉は頭の中で意味をなさない。
意味をなさないそのままに私の意識は闇へと沈んだ。

※　※　※

フィアナレーデが意識を失う直前に呟いた言葉は彼にとって衝撃的だった。
よりにもよって幼馴染で護衛騎士の自分に誰？なんて。それでも今ここにいたのが自分で良かったと思った。フィアの婚約者で幼馴染のラーダリオ……ラーダが今のセリフを聞いたのならきっとショック死してるに違いない。同僚に任せて本営に置いてきたのは正解だった。

———落下による一時的なショックだろうか……？

もしかしたら、記憶を失っているのかも知れない……そんな一抹の不安が胸を過ぎる。
その不安を首を振って否定しながらフィアの肩を看た。出血した跡があるというのに……ちぎれた服の隙間から見えるその肩は滑ら

かな傷一つないものである。フィアに医療系の魔術は使えない。誰かがここにいたのだろうか？彼女を助けていなくなった？そして別の誰かもいたはずなのだ。フィアを傷つけた何者かも……。どちらにしても、彼女が国王陛下より賜った一か月の調査期間はなかったものになるだろう。一国の王女が怪我をした状況で（治っているようだが）危険な何者かが森に潜んでいると思われるこの状況で調査が続行できるとは思わない。フィアは落胆するだろうが……目が覚めて落ち着いたら襲撃者の事も確認しなければならないが……今は本営に戻り、速やかに撤収準備をするのが良さそうだった。国に帰ればきっと皆でグレイシア王女の小言を聞く羽目になるだろう。

それでもいい。無事に小言が聞けそうな状況で良かったと思った。この、自分にとって妹のようなフィアが失われていたらと思うと心臓が凍りそうだ。

取りあえず、魔術の網を上から降ろしてもらいフィアを引き上げる事にすると彼は一人安堵の息を吐いた。

不安と混乱と

唐突に目が覚めて驚いた。
天蓋つきのベットの上である。挙動不審な様相でキョロキョロと周りを見渡すと、3人は寝れるゆったりとしたつくりで、頑丈なな竜の角でつくられたであろうベットだった。柱や装飾部分は細かな彫刻に彩られている。

———ここはどこ……かしら？

見覚えはない。知らない部屋だと感じる。
ここにいる前の記憶を探ってみると、黄金色の双眸を思い出した。

———そう、確か……あの穴から落ちたのだわ。

そう思い出すと慌てて身体に痛いところがないか確認する。腕も足も痣ひとつなく綺麗な状態なのに安心して、ほうっと息を吐く。

———きっとあの方が助けてくれたのですね。

もしかしたらここはあの人の屋敷なのかもしれない。穴に落ちて倒れている私を見つけて助けてくれたのだろう。そう思うと少し恥ずかしかった。頬が薔薇色に染まる。あんな所に落ちるなんてきっと間抜けな娘と思われたに違いなかった。そっとため息を吐くと部屋を見渡してみる。何枚もある大きな窓は陽の光をこの部屋に導いて心地良い。刺繍が細かいレースのカーテンが風を受けてふわりと舞った。飾られた絵画も花瓶もテーブルも質素なように見えて細部まで技術を凝らした素敵なものだ。ふと、壁にある大きな鏡に目が行った。なんの気なしにベットから足を出す。つま先を降ろした大理

石の床はひやりと冷たくまだ少しはっきりしていなかった頭をすっきりさせるのには十分だった。全身を鏡に映してみると、しなやかな身体つきの美しい少女がこちらを不思議そうに見返していた。

――――私……？

私の髪の色はこんなに濃い蜂蜜色だったかしら？それに……腰まである髪をすくってみる。こんなに髪は短かったかしら？何か良く理解できない程のかすかな違和感。初めて、不安が胸に湧き上がる。地に足がついてないような心許ない感覚。そう怯えた時だった。

重厚なドアが音を立てて開く……。

入ってきたのは深緑のドレスに身を纏った女性だった。鏡の前にいる私を見て驚いたように目を見張ると嬉しそうに顔を綻ばせて駆け寄ってくる。

「フィアっ」

そう言って強く抱きしめられた。

「あぁ、もうっこの私を心配させるなんてあなたったらっ！痛いところはない？お腹は空いてないかしら？そうだわ、アデラ！お父様とお母様にフィアが目を覚ましたと！！あと、ついでといいから役立たずさん達にも連絡してあげて！あと軽くお腹に入れられるものを！！！」

この状況に軽くパニックを起こした私の頭に初めて届いたのはこの女性（ひと）の声、一番最初に発せられた『フィア』という……。人の名でしかないもの……。自分の名ではない、と思う。

――じゃあ、私の名は……？

そう、考えて初めて自分の名前が思い出せない事に気がついた。

――あ。

それだけじゃない……。名前以外の記憶も……、ナイ。

私の記憶はあの穴から見上げた光景がすべて……その前の事が、思い出せなかった。

心音が跳ね上がる。ドクドクとした音が耳に響く。唇から血の気が失せ、舌が強張るのがわかった。

かすかな悲鳴を漏らすと、いぶかしく思ったのか抱きしめている腕が緩んだ。

できた隙間に自身の腕を入れて勢いよく突き放す！驚いた、傷ついたこの麗人の顔は鏡で見た私の顔とよく似ている。けれど……。

「あ、あなたは誰？私、は誰？私、私どうしてっ！！」

混乱のままに叫ぶと目の前の女性（ひと）の顔から血の気が失せた。あぁ、そんな――という呟きがその震える唇から洩れる。私の叫びに扉の傍で控えていた婦人が胸元に手を寄せて哀しい顔をしているのが見えた。彼女は決意を込めた瞳で私をみると――医務官を呼んでまいります。そう言ってこの場から立ち去った。

心臓が痛い。きっと私の顔も真っ青になっているだろう。視界がぶれる。

「……ここは、どこなの……？」

目の前が真っ暗になり、もはや立っている事はできなかった。力な

く座り込む。慌てて駆け寄る気配がしたけれど私にはどれも現実感の伴わない悪夢のように思えた。

※　　※　　※

「――――記憶、がないと……」

そう重々しく呟いたのは陛下だ。俺はやはり、という思いと共に唇を噛み締めた。報告はしてあった。

けれど、誰も……俺だってソレを本気にはしてなかったのだ。フィアの記憶が失われているだなんて。力なく横たわる彼女を見る。青白いその顔……普段の勝気で姫とも思えないお転婆ぶりを知っている者からすればその姿はあまりにも痛々しかった。妃殿下は立っていられず先程から椅子の上で涙を拭っていた。気の強さに関してはフィアよりも上を行くグレイシア――――シアですら青い顔で震えながら立ちつくしている。ラーダは壁に寄り掛かったまま動かない。フィアの兄トルヴェンと一番上の姉エレジアは今外交で隣国の空の下だ。報せは送ったけれど公務をおろそかにはできない。予定通りあと2週間は帰ってこれないはずだった。

「グレイシア姫のお言葉から推察するに間違いないかと……。問題なのは襲撃による心因性のショックが原因なのか穴に落ちた時の外傷性のショックが原因なのか分からないことです。フィアナレーデ姫の傷は何者かによって癒されていました。結果、姫様の脳には現在異常は見られません。しかし、異常がなかったとも言えんのです。……記憶は戻るかもしれませんが、このままということもありえます。」

医務官のダリウスが口を開く。

「フィアナレーデ姫は大変な混乱の中にいらっしゃるでしょう。記憶のない姫様が一番お辛いと思われます。お倒れになるほどに傷ついておられるのです。ですから、無理に記憶を取り戻させようとは思わないことです。こういうことは大変デリケートな問題ですので……できるだけ普通に接する事――何かすれば記憶が戻るかも、という期待は禁物です。ゆっくりと現状を認識して頂くのが良いでしょう」

そう沈痛な面持ちでダリウスが告げれば陛下が頷く。

「わかった……ダリウス。フィアの経過を診るのはその方に任せる。レダ……レダリアーナ、泣くでない。フィアは死んだわけではないのだ。記憶を失ったとしても私達の可愛いフィアに変わりない。思い出など新たにつくれば良いのだ。それにいつかは記憶が戻る時もあるかもしれぬぞ？その時にそんな顔をしていればフィアがお主を心配するであろう」

陛下はそういうと妃殿下の肩を優しく抱きしめた。そうしてシアの方を見て心配そうに眉を寄せる。

「シア、お前もだ。心配するなとは言わんがその様子ではフィアも落ち着くまい。ここにはアデラをつける。少し休みなさい。……ラーダリオ、ルドヴィス。先にも言ったが……これはその方等の所為ではない。フィアがお主らの目を欺いて本営を抜け出したのがそもそもの発端。護衛の意味がないとそなた等は言ったが、それを責めるのなら私はフィアの姫として自覚のない行為を責めねばぬ。……己を責めるな。今、できる事をせよ。フィアを襲ったのが何

者であったかこれで分からなくなってしまった。あの場所にいる伝説めいた魔物の類であればまだ良いが、敵国の間者や、我が国の身内のしでかした事かもしれぬ。」

陛下のその言葉に俺とラーダはハッと目を合わせた。

「護衛を手配いたします。それと魔術士に鼠の動向を監視してもらいましょう」

俺の言葉に陛下が頷く。俺はラーダと二人、礼をとるとフィアの部屋を辞した。

部屋を辞した瞬間。隣で聞こえた唸り声にそっと声をかける。

「ラーダ……大丈夫か？」

「――っ大丈夫なはずないだろ。もし、フィアを傷つけた奴がこの辺にいるんなら……殺してやる！」

ラーダの普段は穏やかな新緑の瞳が怒りにゆらゆらと揺れている。長く伸ばしたこげ茶の髪もパチパチと火花を飛ばしそうな勢いで波打っていた。

「殺すなバカ。証拠が消える。半殺しにならしていいぞ。俺もそうする。魔術士への伝達は任せたからな？魔術士長殿……俺は騎士団に行ってくる」

「了解した。護衛騎士団長殿」

互いの拳を打ちつけて別れると俺達は別々の方向に向かって歩いた。

俺は、胸元に着いている徽章を引き剥がし装飾として飾られている

石を左に捻った。
これで、団長達に緊急招集の伝令が飛んだはずだである。鍛錬場の横にある会議室に向けて俺は歩みを早くした――――。

不安と混乱と（後書き）

やっと八割がた主要人物の名前がでてきました。
もっと早く書けるといいんですが……（汗

胎動

爆炎が舞った。自分は彼女に手を伸ばす。狂おしく求めて名を呼ぶ……。なのに彼女は嫌々と首を振ってこちらには来ない。この場にいるのは二人だけ。だってそうなるように＊＊＊＊から。＊＊＊＊。＊＊＊。愛している。君を君だけを。なのに何故君はこの手を取らないのか。あいつはもういない。

僕等の邪魔をする＊＊＊＊＊＊はもう＊＊だ。あぁ君は美しい。泣いている顔も、怒っている顔もすべて僕だけのものだ。＊＊＊。＊＊＊あいしている。なのに何故僕は君の顔を思い出せないのだろう……。

悪夢に悲鳴を上げて目を覚ます。呼吸が荒い。冷や汗が背中を伝う。外はまだ薄暗く鳥の声さえ聞こえない……まだ朝は来ないようだった。この所おかしな夢ばかり見る。記憶にない夢だ。なのに生々しい感情をともなって夜毎彼を苛む。変だ。オカシイ。そう思うのにソレが当たり前のように感じる自分もいるのだ。寝不足のせいか最近日中に記憶が飛ぶ事も多い。そろそろ、寝る前に良く眠れる薬を調合する必要がありそうだった。

※　　※　　※

フィアの記憶が無くなってから一カ月が経とうとしていた。彼女の記憶が戻る気配はない。

この頃には、周辺諸国の不審な動きも特になく。かつて謀反を企ん

だために辺境で隔離されている陛下の伯父、ドルニア侯にも表立った動きはないために王宮内に限っては厳戒態勢の警護はされないようになっていた。
最初の混乱を乗り切ったフィアは落ち着きを取り戻し、皆との会話にも笑顔が見れるようになってきた。でも、俺は知っていた。皆の名前を羊皮紙に書いて一生懸命覚える彼女を。夜、バルコニーに一人で立つ彼女を。
だから王宮内の一郭、誰も知らないような小さな庭園の泉の畔で声を殺して泣くフィアを見たとき、たいして驚きはしなかった。もっともフィアは酷く驚いた顔をして隠れようとしたのだけれど。

「あー、なんだ……俺は今から庭の木だ。ただの木にちょっと愚痴をこぼしてみたらどうだ？ただの木だから誰かに言ったりしないし、溜め込み過ぎは身体に良くないしな」

我ながら苦しい言い訳めいてそう伝えると、フィアはちょっとびっくりしたような顔をしてから微かに微笑んだ。

「……私、話す木なんて初めて見ました。お気持ち、有難うございます。でも、大丈夫です」

涙を拭ってフィアは言う。———言っておくが全然大丈夫そうじゃない。

「残念ながら、俺は泣いてる女の大丈夫は信用しないようにしてるんだ。結局、俺達には記憶を失った奴の気持ちなんてわからないしな。だから言ってもらったほうが理解できる。陛下や妃殿下、お前の兄貴や姉貴にも言ってやった方が喜ぶと思うぞ？皆お前に頼って欲しくてしょうがないんだから。ただ、いきなりはむりだろ？練習台になってやるから、言ってみろ」

俺が軽い口調でそういえば、フィアは唇を噛み締めてうつ向いた。
俺は、せかしたりせずに、ただ傍にいる。

「……じゃあ、庭の木さん、聞いてもらえますか……？私、何も思い出せないんです。皆さんがそれを責めたりしないのは知っているんです。だって皆さん凄く優しくしてくれます。優しすぎるくらいです。でもだからこそ、優しくされると申し訳ない気持ちになるの。だってそうやって優しくしてもらっていいのは皆さんのフィアナレーデだからっ、私、私、思い出したいと思うんです。だ、だけどっ、全然っ、ダメでっ……記録映像でっ、こっそり……昔の私を見たんです……。今と、全然違ってて……私、私……」

後はただ泣きじゃくるフィアの頭を俺はただずっと撫で続ける。普通に、接しよう接しようと努めて来たつもりだが、普通に接しようとするあまり、皆でフィアの顔色を窺い過ぎていた事に今更ながらに気付かされた。それが、優しすぎる皆の態度につながり、結果として彼女を追いつめていたのだろう。これはちょっと内密にダリウスと相談する必要がありそうだった。

「庭の木から忠告をしてもいいか？皆が優しくするのはお前を愛しているからだ。ここで勘違いしてもらったら困るんだが、それは記憶を失ったフィアも愛してるって事だぞ？陛下はフィアの記憶がないと分かった時、記憶がなくとも新しい思い出をつくればいいとおっしゃった。その気持ちは皆が同じだと思って欲しい。後、俺達が必要以上に優しくしてしまうのは今のフィアが何で傷つくかわからないからビクビクしてるっていうのもあるかもな」

俺の言葉が思いがけなかったのかフィアは鼻を啜りながら少し顔をあげた。

「っすん。ビクビクですか？」

「そう、ビクビク。皆、フィアを傷つけてそれが原因で嫌われたくないんだ」

「私、嫌ったりしません！むしろ私が嫌われそうで……」

「そこだよな。――――俺等は記憶が無くなってフィアの性格が変わったくらいじゃお前の事嫌いになったりしない。けど、記憶がないから、どこまでがフィアの大丈夫かわからないからフィアに嫌われるようなことをしたくない。逆にフィアからみると別に俺等の事嫌いになったりしないけど、思い出せない事で嫌われるんじゃないかって怯えてる。なんだか皆嫌われたくないってだけのはずなんだけどな？結局みんな嫌われる『かもしれない』にとらわれ過ぎなんだ」

結構皆、馬鹿だよな。というとフィアがクスクスと笑う。

「ルド様がそういうと私の悩みって小さな事みたいです」

「悩みが大きいか小さいかは当人にしか分からないと思うが……小さな事みたいに思ってもらえたんなら庭の木をした甲斐があったな。お前、もうちょっと我儘言ったほうがいいぞ？そのほうが絶対喜ばれる。――――取りあえず、ここで人に会った事はないから、フィアが少し一人になりたくなったらここにくればいい。まぁ、時々俺は寄るけど。昼寝しに来たりとかな。また庭の木が入用になったら声をかけてくれればいい」

慣れない事をしたせいで少々気恥かしい。照れ隠しに頬を掻きながらそう伝える。

「有難うございます。おかげで元気になりました。」

そう言って頭を下げるフィアを見て頷くと俺はヒラヒラと手を振って仕事に戻った。

※　　※

※　　※

ルド様が立ち去ってから、私はほうっと息を吐いた。今までしこりのように胸にわだかまっていた不安がびっくりするぐらい小さくなっていた。記憶がなくなった事実と向き合ってからずっと、この優しい人たちに嫌われたくないという気持ちで一杯だった。もう少し肩から力を抜いたほうがいいのかもしれない。新しく思い出がつくれるのなら、それが許されるのなら私は皆に心配顔で見られる私じゃなくて

笑顔で見てもらえる私になりたかった。そう思うと初めて希望と呼べるような微かな気持ちが胸に灯った。温かな気持ちを抱きしめて私もその場を後にした。

※　　※

※　　※

あぁ、あぁ……世界はなんて光に満ちているのだろう。あの深い闇の中、彼女を求めて彷徨った日々――――彼女はきっとまだあの闇の中にいるだろう。ボクが助ければきっと今度は……今度こそ彼

女はボクを、こんどこそ？なんだったろうか。憎い……イトシイ彼女。イトシイとはなんだっただろうか。ただ胸に空いた穴がある。それを埋めたくて取り戻したくてボクは……。あぁ、記憶が定まらない。何か、大切な事を忘れている気がする。ただ、焦がれる程の渇きを癒したくてボクは……目の前にいた女を＊＊＊。

胎動（後書き）

記憶喪失者ひとり追加です。主要人物残りの人たち出れず。
一応次で出そろう予定。

一時の平穏と不安の種子

決意を新たに、フィアはお父様にお願いをしてみた。かつての私がしていたように、魔術をと剣術を勉強したいと申し出たのだ。お父様はちょっと吃驚した顔をなさったけれど嬉しそうにいいよ、とおっしゃった。お母様は少し心配そうだったけれどやってみたいんですといったら、絶対無理はしないようにとおっしゃって許して下さった。明日から私は魔術をラーダ様、剣術をルド様に教えてもらう。それに合わせて服装もドレスから動きやすいものに着替えた。かつての私が着ていたというそれは服の裾の部分が膝のあたりまでしかなくてちょっと恥ずかしい。でも、ドレスみたいにコルセットでギュウギュウされなくて良いのでそこは好きになれそうだった。

「フィアっとっても可愛らしいわ」

そういって下さったのはグレイシアお姉様だ。

「もうちょっと、丈をのばした方がいいのじゃなくて？前々から言ってるけど可愛い妹の足に男どもが視線を向けるのは腹立たしいわ」

そういって私の足をじっと見つめるのはエレジアお姉様。

「そんな阿呆がいたら私ととラーダとルドに再起不能にされると思うよ」

そう言いながら物騒にも剣の柄をいじり始めたのがトルヴェンお兄様だ。

「まぁ、天馬騎士団（ペガサス）の団長と魔術師長、護衛騎士団団長を敵にまわ

そうとは誰も思わないでしょうけどね」

そう言ってエレジアお姉様が口元に手をあてて微笑む。

トルヴェンお兄様とエレジアお姉様は似てないけど双子らしい。どちらかというとエレジアお姉様とグレイシアお姉様の方が双子みたいに見えるのだけれど……。

こうして兄妹そろってみるとお父様とお母様の特徴が面白いくらいに分散されているのがわかる。お父様は黒髪に藍色の瞳、お母様は蜂蜜色の髪に深緑の瞳をしてらっしゃる。

トルヴェンお兄様は黒髪に深緑の瞳で顔はお父様の若い頃にそっくり。エレジアお姉様は少し色は濃いけれど私と一緒の蜂蜜色の髪に藍色の瞳。グレイシアお姉様が黒髪に深緑の瞳で……髪や目の色は違うけれど私達姉妹はどちらかと言うとお母様に良く似ている。

「トルヴェンお兄様あんまり皆をいじめないで下さい。私知ってるんですよ？この前お花を持ってきて下さった方を追い返していたでしょう」

そうきっぱり言うとお兄様は私から目を逸らした。

「そんなこともあったような、なかったような……でも、私よりラーダに言った方がいいと思うなぁ。それ」

苦笑しているお兄様を置いておいてラーダ様の事を考えた。私の婚約者だというその人。彼も似たような事をやっているのだろうか？

「ラーダ様ですか？」

そういって首をかしげるとお兄様は「あいつは特大の猫をかぶって

いるからね？」と笑いながらおっしゃった。

「そう言えばずっと気になってた事があるのだけど……フィア、あなたラーダとルドだけ様はつけてるけど愛称で呼んでるわよね？」

「あぁ、それは私が臥せっていた時にお二人がお見舞いに来て下さったんですけど……その時に愛称で呼んでほしいとおっしゃられたので……」

エレジアお姉様の問いにそう答えるとグレイシアお姉様の目がキラリと光る。

「……抜け駆けね。抜け駆けだわ。エレ姉様後で絞めましょう」

「ジア……絞めるなんて姫のすることではないわ。暫く動けなくなる薬を盛りましょう」

お姉様方、ちょっと楽しそうなのは何故なのでしょう？

「お前ら……気持ちは分かるが……フィアが驚いてるよ？わが妹ながら敵にまわしたくないなぁ。だが、確かにあいつら二人だけ愛称で呼ばれるのはズルイと思うんだ。フィア、これからは是非、私の事は『ヴェン兄サマ』とっ」

「ず、ずるいっ抜け駆けですわ！兄様！フィア？私の事も『シア姉様』と呼んでいいのよ？」

「それなら私もフィアに『エレ姉様』と呼んで貰いたいわね」

――――お姉様、お兄様近いです。

三人の期待に満ち満ちた視線を受けると流石に嫌ですとは言えず……。

「え、えと……ヴェン兄様、シア姉様、エレ姉様ですね？」

そう言うと兄様達がとても嬉しそうに喜び合っていたので、私も何故だか嬉しい気持ちになって微笑んでしまった。

※　　※　　※

「明日からフィアと二人っきりで魔術の勉強かぁ……」

「いや、二人っきりじゃないだろ。絶対、ヴェンかシアかエレが様子を見に、とか言って来るだろうしな。それに女官とか、衛兵とか普通にいるだろうが」

夢見がちに馬鹿みたいな事を言うラーダに呆れた顔で言うと睨まれた。

廊下を二人フィアの部屋に向かって歩く。今日は、講師としての顔合わせだ。公私の区別はつけなければならない、との事なので一応の形だけとしてのだが。

「夢ぐらいみさせろよ。だよな……絶対あいつら来るよな。特にヴェン。馬から落ちて動けなくなればいい」

「おいおい。勘弁してくれ。あいつが動けなくなったら俺の仕事が増えるんだが？」

「いいじゃないか。そうすればお前が私のフィアと剣術の稽古をしなくて済むし。万事解決。素晴らしい」

「お前が馬からオチロ」

「それはごめんこうむる。……それより、城下の例の事件進展してるのか？」

先程までの口調を改めてラーダが俺の方を見る。

「駄目だな。一応、緘口令は布いているが、人の口に戸は建てられん。……そもそも、死因が不明だ。健康な若い女……外傷はないし解剖の結果も死につながるものは発見できない。特徴的なのは首についた黒い手の跡……新たな怪談話が生まれるには十分な環境だ」

「聞いたよ。黒い手の魔物がって噂は立ってるみたいだね。……多分陛下やヴェン達も気付いてると思うけど……ルド、気付いてるよね？」

「……あぁ……この事件が起こりはじめたのは調査隊が帰ってきてからだ。しかも殺された女は金色の髪に藍色の瞳……フィアに似た特徴を持ってる」

「ずっと……気になってた事があるんだ。フィアが襲われた後撤収する前に、魔術師達とフィアの杖が落ちていた現場に行ったんだ。……魔術っていうのには個々の指紋みたいな特徴がでる。私達はそれを術痕（アルマ）と呼んでいるけど、そのアルマから襲撃者は我が国や、他国の魔術師協会に属していない術師であるのはすぐにわかった。

私達は杖の宝玉から協会の『知識の泉』に接続できるからね。あと、わかったのはその術師が古い呪文を使ったって言うことだ。別に、珍しい呪文ではないけれど……術公式の展開にコンマ五秒程のずれが生じるから最近では使われていない。でも、威力から察するに相当の使い手のはずなんだ……」

その時の事を思い出したのかラーダの顔が堅く強張る。そこまで言われて俺はあの現場を見たとき感じた微かな違和感を思い出した。ラーダの言った事を合わせて考えてハタと気付く。

「お前が言いたいのは……襲撃者が殺すつもりで魔術を使っているのに対して、フィアが足止め程度の応戦しかしてないということか！」

思わず、立ち止まって目を見開く。

「……そうだ。フィアは戦えない、護られるだけの女じゃない。戦えたはずなんだ。フィア程の魔術の使い手なら……」

「馬鹿な！じゃあ知っている奴だというのか？フィアが戦うのを躊躇うような？」

「わからない。もしかしたら別の理由があったかもしれない……。けど、城下町の事件が関係ないって思えないんだ。……もしかしたら犯人はすぐ傍にいるかもしれないって。私だって確信があるわけじゃない。ただ……不安なんだ。フィアを喪う事になったら耐えられない」

苦痛に顔を歪めるラーダに同じ思いで肩を叩く。

「そんなことさせるものか。杞憂で終わればいいが……可能性があるなら俺とお前で調べよう。今はまだ事は城外だ。下手に騒ぎたてるのは要らぬ注目を集めかねない。お前、アミュレットとかの呪具つくるの得意だったろ？フィアに持たせろ。」

そう言いながら再び歩き出すとラーダも頷きながら俺の後に続く。

「……そうだね。それがいいと私も思う。もちろん溢れんばかりの愛情を込めてつくるよ。私なら婚約者っていう立場上プレゼントを贈るには適しているしね――――所であえて聞くけどシアには呪具をつくれっていわないの？」

先程の暗い会話を振り払うかのようにラーダが、からかい半分な口調で俺を見る。

「あえて言って欲しいのか？シアが知り合いだからと言って攻撃を躊躇う女だと思うか？お前だって覚えているだろうが。野外訓練の時のアイツの血も涙もないえげつない攻撃を。痺れ粉で痺れさせて魔法でトドメって……婚約者にする事じゃないだろ」

「あはは。あれはメイウス卿も可愛そうだったね？深緑狼騎士団（ガイアウルフ）団長カタなしっていうか……」

「そうか？俺には嬉しそうに見えた」

愛する婚約者にノされて幸せっていうのは男としてどうかと思うが、当人同士が良ければ……まぁ、口を出す事じゃない。

「シアも素直じゃないし、あの二人にはあれぐらいで丁度いいのかもね」

そうこう言っている間にフィアの部屋の前に着いた。部屋の前に立つ衛兵に敬礼されて中に入る。中では妹馬鹿な3兄妹がフィアに自分達も愛称で呼んで欲しいと強請っている最中だった。

※　　※　　※

喜んでいる兄様達の後ろの開いたドアからラーダ様とルド様が顔を出す。

「あ、ラーダ様、ルド様！」

声をかけるとラーダ様は笑顔で、ルド様は片手を軽く挙げて答えて下さった。

「来たわね。抜け駆け邪魔男ども」

ジア姉様に憎い仇を見るような目で睨まれて二人が軽くあとじさる。

「俺たちは正式な手順で愛称で呼んで貰うようになっただけだ。講師の件はフィアが望んだことだろ？それにお前らも愛称で呼んでもらえるようになったんだったら別にいいだろうが」

「ま、でも抜け駆けには違いまい。シアとジアに注意しろよ？さっき絞めるだの一服盛るだの言ってたからな」

「……気をつけよう」

嬉しそうに言うヴェン兄様にルド様とラーダ様がげんなりした顔でそう言った。

「大丈夫ですよ。姉様達はそんな酷い事なさりません。ですよね？」

そういって姉様方に微笑むと。目を逸らされた。

「そうね。そんな酷い事しませんわ」

シア姉様が慌てた感じで力説して下さった。兄様とルド様達は後ろを向いて肩を震わせている。

何故かしら？

「それより、ルド様とラーダ様が私の講師をして下さると窺いました。どうぞ、宜しくお願い致します」

頭を下げると慌てて二人がこちらにやってきた。

「頭を下げる必要はないフィア。顔をあげて。講師役を名乗り出たのは私達だし、この顔合わせも形式だけのものだから君が頭を下げる必要はないんだ」

「ですけど、お二人ともお忙しい方なのに……時間をとらせて申し訳ないです」

そう申し訳なさそうに眉根を寄せると息を飲んだラーダ様に手を取られる。

「私は全ッ然構わない。むしろ嬉しいというか楽しみというか人生悔いなしというか」

暴走し気味に私の手を握るラーダ様の後頭部をルド様が思い切り手刀で叩いた。ラーダ様の口から不思議な声が出てそのまま蹲ってしまわれる。

「良くやりました。ルド。やっぱり勉強中は私達が交代で見学させてもらうのがよさそうね」

エレ姉様が冷ややかな目で蹲るラーダ様を見ていた。シア姉様とヴェン兄様も冷ややかな目で頷いている。

「馬鹿」

そう言ってルド様だけが憐れむような目をラーダ様に注いでいた。

※　※　※

「やぁ、姫君の部屋からお帰りかい？ラーダと二人、講師を務めるそうじゃないか」

「ラドクリフ様……えぇ、フィアが昔の勘を取り戻すのにもいいですし。ラドクリフ様は陛下との謁見の帰りですか？」

東の回廊から中央の大広間に出た所で若い男に声をかけられた。東の賢者ラドクリフ様だ。

「うん。この前の調査団の一件。四方の賢者を代表して俺があの森

の封印を解いたからね。あの場にもいたから魔術とは違う精霊術の観点から意見を求められていたんだけど……どうもね。あの場の精霊達は恥ずかしがり屋らしい。他の賢者達にも一緒に行って聞いてもらったんだけど……あそこの精霊は外の精霊と違う。閉ざされた環境にあるからじゃなくて、もっと違う……何かの力で歪んでるんだ」

人の良い顔を考えるようにして顰めてラドクリフ様がそう言った。

「歪んでいる……まるで呪いのようですね」

「確かにそう言ってもおかしくないね。おかげでこちらの言葉もあちらの言葉も通じないんだ」

お手上げだね、と手を軽く挙げてラドクリフ様が肩をすくめる。

「そう言えば不穏な事件が街で起きているみたいだね。何かあれば私も協力しよう。私の塔はここから近いし……それじゃあ、私はそろそろ帰るよ。君も、明日から頑張って」

「はい。有難うございます。街で起こっている事件は不可解な事も多いのできっとお願いする事もあるかと。その時はこちらから伺わせて頂きます。――ラドクリフ様もお気を付けて」

そう言って俺はラドクリフ様と別れた。

――呪いか……。

それは俺の心に重く圧し掛かって一抹の不安を抱かせた。

幕間～まどろむもの～

とろりとした深い闇の中ソレは微かに身じろぎした。
コエがする。あの時もそうだった。産まれたばかりのソレを強く惹き付けたコエ。

―――どうして……どうしてっ！！……っどうしてっっ！！！
……何故……？

悲しみと、怒りと、戸惑いと、不安と……。ごちゃ混ぜになったココロ。

―――何故なのウルク……。私の幸せを祈ると言ってくれたじゃない！！！

ナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼ……ドウシテ？

混乱の中聞こえるコエはとても澄んでいて綺麗だった。強烈な光を放つその魂。
その声が内包する思いはソレの知らないものだったから、とても美味しそうに思えて手をのばした。
悲鳴と怒号と怨嗟のコエ。名前を知らないその感情の多くをソレは貪りながら喰べた。
産まれたばかりのソレはとてもお腹を満たされて眠ったのだ。

なのに何故だろう。

あの、入れ物に入った小さな生き物たちは今もここにいる。闇と同化した哀れな生き物は己が何者であったのかも忘れ甘美なる苦しみ

のコエをあげながらソレの腹を満たす。

なのに、ソレはとても飢えていた。どうしてだろう。自分は満足していたはずだったのに。

気がつけば、一番ソレを惹き付けたコエの生き物がいない。

まどろみの中、それはコエの主を求めて手を伸ばした———。

死の手

爆炎が舞った。自分は彼女に手を伸ばす。狂おしく求めて名を呼ぶ……。なのに彼女は嫌々と首を振ってこちらには来ない。この場にいるのは二人だけ。だってそうなるように殺したから。リル＊＊＊。＊＊＊。愛している。君を君だけを。なのに何故君はこの手を取らないのか。あいつはもういない。
僕等の邪魔をする＊＊＊＊インはもう＊んだ。あぁ君は美しい。泣いている顔も、怒っている顔もすべて僕だけのものだ。ア＊＊。＊＊＊あいしている。なのに何故僕は君の顔を思い出せないのだろう……。

夢から目が覚めて……自分が誰かを思い出す。

――薬が効かない。

夢は彼を苛むのをやめようとしないどころか日ごと鮮明さを増す。まるで彼自身の記憶のように炎の熱も煙もとてもリアルだった。

――オカシイ異常だ。

記憶の欠落は頻度を増している。最近は夜にも徘徊しているようだ。思えばあの森に行ってからすべてがおかしくなった気がする。森の呪いの話を思い出す。あの森で一夜を明かして気が狂った男の話。自分も少しずつ狂っていくのだろうか……？人知れぬ恐怖を抱えて彼は両手で顔を覆った。

※　　※　　※

気持ちの良い風がバルコニーを吹き抜ける。新緑を身にまとった木々がサヤサヤと梢を揺らした。

今日から私はルド様とラーダ様に剣術と魔術を教えて頂く。その初めての講義がバルコニーで行われる事になったのだ。今は、ラーダ様の魔術の講義。昨日、宣言していた通りシア姉様がご一緒してくださる。ラーダ様が空中に浮かぶ水晶版の上に文字を書いた。『魔術・その成り立ち』

「魔術とは、真祖マルドゥーク・エウレハウンゼンが邪神ガルツァークを倒すために神々から与えられた力だと言われています。精霊術とは体系を異にし、魔術が術式を込めた呪文（スペル）で魔方陣を構築、素（エレ）霊（メント）の力を行使するのに対し精霊術は契約の元、祈りと呼ばれる聖句（ホリーワード）を唱える事で精霊（エレメンタル）の力を行使するという特徴をもっています。魔術、精霊術ともに攻撃、防御、治癒の術があるけれど、魔術が特に攻撃に優れているのに対して、精霊術は属性にもよりますが治癒の術に対して優れていると言えます」

ラーダ様は一旦言葉を切ると私の目をみて軽く微笑まれた。シア姉様がそんなラーダ様を軽く睨む。

「では、何故神々は魔術を我々に与えたのか？それは魔術は魔力があれば使う事ができるけれど精霊術は精霊の声を聞き精霊を見る事ができる者にしかなれないからです。近年その数は減っているけれど、妃殿下と四方の賢者様方はこの精霊術師ですね」

私は臥せっている時にお見舞いにきて下さった東の賢者ラドクリフ

様を思い浮かべた。
ラドクリフ様はお父様の乳母の末の息子でお母様と一緒に精霊術を学んだ方だそうだ。賢者様と言われると気難しいお爺さんを想像していたので、年の割に若く見えるラドクリフ様には少し驚いた。とても気さくな方で、綺麗なお花を沢山持ってきてくださったのを覚えている。

「他の特徴的な違いは魔術士の力は生来の魔力の量と本人の努力によって左右されるのに対し、精霊術士の力量はより強い精霊と契約できるかにかかっている事です。それと精霊術士の能力は遺伝しないのに対し魔力は遺伝によって受け継がれる場合が多いですね。魔術士同士で結婚するのが多いのはこのためです」

私は頷きながらメモをとる。だから私の婚約者は魔術士であるラーダ様なのかもしれない。

「さてここからは魔術の仕組みを説明します。我々が使う魔術のスペルは、その使い手によって個々に違うものです。多くは基礎の知識を学び、本人が使いやすいように改良を加えます。主にスペルの簡略化です。もしも、魔力が拮抗している魔術士同士で戦うとします。同じスペルを唱えたのに一人が勝ち一人が負けました。何故だと思いますか？」

いたずらっぽい笑みを浮かべてラーダ様が私に質問する。同じ魔力で同じスペルなのだとしたら本来であれば相殺されるはずである。

「勝った方の方がスペルを唱えるのが早かったからですか？」

私がそう言うと、ラーダ様は満足げに頷いた。

「その通りです。嫌な話ですが、戦場などの場合それが命取りになります。時間が短縮できればできるほど打てる手は増えるのです。ですから、魔術士はスペルを理解し簡略化に努めます。最近はは道具に頼る方達も多いようですが」

「道具ですか？」

「えぇ。物にスペルを込めるやり方です。装身具にする方が多いですね。魔力がない方達にも使える物の多くは一度使ったら二度と使えない物です。魔術道具を扱うお店で購入できますが込められたスペルによって値段が変わります。半永久的に使える物の多くは魔力がある方にしか使えません。何故なら術道具が魔術を使うと同時に使用者から、次に使用するための魔力をチャージするようにできているからです。これらは、その物が壊れるまで機能しますが、使用者の魔力の量によって使用回数に限りがあります。後は、特殊な鉱石を使用した物がありますね。竜の化石から採れた心臓等がそうです。それ自体に強力な魔力が宿っているために永久的に使える大変希少な物です。しかも大変頑丈で壊れにくい。だからこそとても高額で取引されます。今はそれを模した疑似宝珠（オプトル）というのもあるけれどね。騎士団の徽章があるでしょう？あれもそうです。あれは非常時に互いに連絡がとれるように石はオプトルが使われています。」

私はルド様の徽章を思い浮かべた。盾を中心に両脇に鎧を着て剣を咥えた獅子。下に向かった剣が交差した上の所に黒い石が嵌っている。黒は護衛騎士団の色だ。隊長であるルド様の獅子は他の騎士と違い赤い房つきの兜をかぶっている。天馬騎士（ペガサスナイツ）団の騎士団長であるヴェン兄様の徽章は
盾を中心に両脇に竿立ちになって鎧を着たペガサスが剣を咥えたものでやはり下に向かって交差した剣の上に青色の石が嵌ったものだった。兄様のペガサスも赤い房つきの兜をかぶっている。

「騎士団だけでなく魔術士のものもありますけどね」

そう言ってラーダ様が見せて下さったのは盾を中心に両脇に片足をあげて杖を掴んだ鷹、下に向かって交差した杖の上に白い石が嵌ったものだった。騎士の方達と違うのは、鎧の代わりに首にアミュレットがかけられている事と魔術士長であるラーダ様の鷹は頭に蔦の冠がされている事だった。

「このように、徽章にはその人物がどこに所属し、何の地位についているか明確にするものです」

「では、私の徽章ももあるんでしょうか？」

「えぇ。フィア様は魔術士でもありこの国の王女ですからね。公式の場でつける徽章があります。フィア様のものは盾を中心に両脇に王女の冠をかぶる杖を咥えた獅子です。宝石の色は『王室の血（ロイヤルブラッド）』を表す赤になります。後は獅子の前足に三本の細い腕輪がはまっていますね。これは第3王女であるという意味を表します……最後はちょっと脱線してしまいましたが、今日は初めての講義ですしこれくらいにしましょうか。それと、フィア様。次の講義までにこの本を読んでおいて下さい」

そう言ってラーダ様が渡して下さったのは『魔術の呪文：基礎』という本だった。パラパラめくると属性別に簡単な呪文が書いてあるようだった。

「初めはここからです。ちょっと子供っぽいと思われるかもしれないですが……魔術は基礎が一番肝心ですからね。次の講義では実際にスペルを唱えて魔術を使ってみましょう」

「はい。次の講義も楽しみです。有難うございましたラーダ様。とてもわかりやすかったです」

「それは良かった。そう言ってもらえたら私も嬉しいよ」

お礼を言うと、講義の時用の改まった言葉づかいとは違ういつものラーダ様の口調に戻って、とても嬉しそうに微笑まれた。

「講義が終わったのならお茶にしましょうか？ラーダあなたもどう？」

シア姉様が女官にお茶を持ってくるように指示を出す。

「そのお誘いにはとても心動かされるものがあるんだけどね……。残念ながら、この後ルドと約束があるんだ。お茶はまた今度誘って貰えると嬉しいな」

本当に残念そうに言うものだから私はちょっと笑ってしまった。

「また、お誘いします。お仕事頑張って下さいね」

「ありがとうフィアっ。君にそういって貰えれば、かなり元気がでるよ」

さりげなく私の手を握るラーダ様。笑顔がとてもまぶしいな、と思っているとラーダ様の指をシア姉様が一本一本引き剥がす。

「お帰りはこちらですわよラーダ先生？調子に乗ると……わかってるわね」

「……ひどいなぁ……シア」

苦笑しながらラーダ様は両手を挙げて私から一歩下がった。

「じゃあ、名残惜しいけど僕は退散するよ。シアも怖いしね。フィア、また次の講義で」

「はい。有難うございました」

私だけに見えるウィンクを一つ残してラーダ様は部屋を後にする。

「まったく油断も隙もないんだから！さて……私達はお茶にしましょうか？」

「はい」

颯爽と去っていくラーダ様を睨みつけてからシア姉様が私の方を見る。

テーブルの上には用意されたばかりの紅茶と可愛らしいプチケーキが何個も乗っていた。

それを見て私とシア姉様は自然と微笑みあった。

※　　※　　※

講義が終わったのか、約束の時間より少し遅れてラーダが顔を出した。この場にはお願いして来て頂いているラドクリフ様と各騎士団

を代表してヴェンの姿がある。ヴェンにだけはここに来る前に俺達の考えを話して協力してもらう事になっていた。可愛い妹に危害が及ぶかもしれないとあって全面協力を申し出られている。こちらとしても心強い。

「申し訳ありません遅くなりました」

俺達の姿を認めてラーダが歩みを早くしながらやって来る。そんなラーダにラドクリフ様がニコニコ笑いながら手を軽く挙げた。

「私もルドに連れてきてもらって今来た所だからね。大丈夫だよ」

その言葉にラーダの顔に笑みが浮かぶ。

「そうでしたか」

ここは、王城の裏にある死体安置所だ。昨日新たに出た例の事件の被害者の遺体を街の死体安置所から密かにこの場所に運んで貰っていたのだ。

「で？問題の遺体はどこかな？」

「……こちらです」

扉をあけて薄暗い階段を降りていくと、ひんやりとした部屋の中、五つある石の台座の上に白い布に包まれた遺体があった。布の膨らみから小柄な女性であると察せられる。
互いに頷きあってから俺が布をめくった。
そこには異常に青白い顔をしてなければ眠っているとしか思えない少女が横たわっていた。

「……眠っているようにしか見えないね……」

そう呟くように言ったのはヴェンだ。俺はその言葉に頷いた。

「可哀想に……安らかな顔をしているのがせめてもの救いか……これが、例の手の跡だね？」

そういうとラドクリフ様が身を屈めて少女の首に着いた黒い手の跡を見る。

「そうです。ですが、舌骨は折れていません。なので絞殺ではありませんし他に死因と思われるいかなる傷も毒も発見されませんでした」

ラーダが今までと同様の状態ですと言いながら少女を示す。

「……闇の精霊に近い力を感じるね。でも闇の精霊では無い。もっと異質のモノだ。あの森のような歪んだ力を感じる。それも……神とか魔の領域に近い力だね……残滓だけでもちょっとした禍々しさだよ。後は……飢えを感じるな。この魔物――魔物と言ってしまっていいと思うけど……こいつは何かにとても飢えてる。後……この子の死因だけれど、これは魂を抜かれた――というか食べられた……という感じがするね」

ラドクリフ様は最後の方を言いにくそうにしながらおっしゃった。顔が苦痛に歪む。

そのあまりの言葉に俺達もとっさに反応できなかった。――魂を？食べられる……？

「そんな！それでは犠牲者の魂はどうなるというんだ？！」

ヴェンが憤りを含んだ声で叫ぶ。俺達皆がきっと同じ気持ちだったに違いない。

「正直……わからない。でも、その魔物の身の内に囚われて輪廻の環に還れない可能性が高いだろうね……」

その言葉にラーダとヴェンが息を飲む。輪廻の環に還れないということは解放のない苦しみを表していると言えた。こんな少女の身にそれは惨過ぎる。

「これ以上犠牲者が増える前に何とかしないとな……」

俺がそう言えば皆が頷く。

「私の契約精霊は水属性だからね。後で西と北の賢者に連絡を取ろう。このあたりの精霊に協力してもらって街を監視してもらうようにしておくよ」

西の賢者様は風の精霊と、北の賢者様は大地の精霊と契約を結ぶ方である。基本、どんな精霊の声も聞ける精霊術士であるが、賢者様方に関して言えば扱える精霊の属性が決まってしまう。それは各精霊の『王』と呼ばれる存在と契約するためだ。精霊王との契約の力が強すぎるため、他属性の精霊だと例え高位精霊であっても契約を結ぶことができなくなるのだという。

「宜しくお願いします。……何としてもこの魔物を滅ぼさねばならない」

ヴェンが沈痛な面持ちで少女に白い布をかける。この少女をフィアに重ねているのだろう。丁度、年も同じ頃だ。重ならないはずがない。四人共、ここに来る前より顔色が悪かった。薄暗い安置所にいるからではない。少女の身に起こった怖ろしい出来事に胸が悪くなる。少女の顔が眠っているようにしか見えないために余計にその醜悪な悪意のようなものを感じて寒気がした。

死の手（後書き）

術とかの仕組みを考えるのは好きですが、表現するのは苦手です（汗
思ったよりも時間がかかりました。
そして、やっと街の少女達がどうなったのかが書けました。
これから魔物が少しずつ表に出てきます。

目覚めたモノ

爆炎が舞った。自分は彼女に手を伸ばす。狂おしく求めて名を呼ぶ……。なのに彼女は嫌々と首を振ってこちらには来ない。この場にいるのは二人だけ。だってそうなるように殺したから。リルア＊＊。ア＊＊。愛している。君を君だけを。なのに何故君はこの手を取らないのか。あいつはもういない。
僕等の邪魔をする＊＊ヴェインはもう＊んだ。あぁ君は美しい。泣いている顔も、怒っている顔もすべて僕だけのものだ。ア＊＊。＊＊ナあいしている。
なのに何故僕は君の顔を思い出せないのだろう……。

「もうもたない……」

静かに呟いて男は粉々に砕けた鏡を見つめた。起きた瞬間目に入ったソレ。鏡の中、自分の目の中に夢に出てくる狂気の男を見たからだ。
薬も呪いも効かない。怖ろしいまでの呪い。

「浸食されているのか？」

自分という人間はこの狂気に食われて死ぬのだろうか？

「く……ふふふっ」

思わず口から零れる笑み。こんなこと誰にも相談できるはずがなかった。人に尊敬される立場の自分がこんな狂気に囚われているなん

て。

※　※　※

深緑まぶしい庭で剣が風を切る音がする。
フィアとルドが型に合わせて剣を振るっているのだ。もう長時間振るっているためかフィアの剣は重さを増し手も上がらなくなってきている。いつもは優しいルドであるが、講師役としては厳しいようだ。

「フィア、剣先まで意識が入ってない。もう少し腕を挙げて」

「っ……はいっ」

流石というものでフィアと同じように剣を振るったはずのルドの額には汗一つ浮いていない。それを見て唇をきつく噛み締めると額に張り付いた髪を腕で擦ってフィアは再び剣を振り始めた。

「最初にしたらキツイんじゃないのか？」

近くに寄って来たヴェンがルドに耳打ちする。

「アホカ。これ以上軽くしてどうする。お前だってこれが野郎だったらもっとシゴクだろうが」

「それはそうだけどね。なんかフィアが可哀想で」

「キエロ。俺の耳元で囁くな気色悪い」

ヨヨと泣きまねをするヴェンの足を容赦なく蹴る。
お返しに見えないように横腹を殴られた。

「よし。素振り後３０回で今日は終りにしようか。最後まで剣先を意識して」

「っ……はいっ」

最後の力を振り絞ってフィアが剣を振るう。それは綺麗な弧を描いてピタリと制止することを繰り返す。それを見ながら俺は昨日の少女の亡骸を思い出していた。フィアに似た色の少女。一瞬その姿がフィアに重なりかけ俺は思わず自分の思考に蓋をした。もしも、フィアがあんな目に合うことになったらきっと俺はその原因のモノをそれが魔物だろうと何だろうと殺すだろう。それは、皆も同じ気持ちのはずで……いや、きっとラーダは永劫の苦しみをと言うかも知れない。そう思った瞬間何故か胸が痛んだ。

「どうした？変な顔をして」

「……なんでもない」

自分でもよくわからない痛みをそのまま考えないようにして俺はヴェンに言った。
そうこうしている間にフィアが素振りを終えこちらを向く。上気した頬はバラ色で妹のように思っている俺にとっても綺麗に見えた。
なんだか、今日の俺は少々おかしい。そんな考えを振り払うために俺はヴェンが持っていたタオルを彼女に投げてやると剣を鞘に入れてフィアに向き直った。

「初めてにしては頑張ったな。ただ、体力がかなり落ちてる。行く行くは剣の稽古の前に走り込みのメニューを追加するからそれに備えて時々城内を散歩したりしておいた方がいい。」

「そうですね……私、まだ息が整いません。ルド様と比べるのも可笑しいですけどもっとちゃんと出来るようになりたいです」

「あぁ。ま、最初から無理するものでもないけどな？あとはこれ。基礎の型取りの本だ。次までにざっと目を通しといてくれ」

上気した頬の汗を拭ってからフィアはそれを受け取った。一瞬触れ合った手の温度ににドキリとしながらも何事もなかったようにパラパラとページをめくる。そこには半月の型だとか、弧蝶の舞だとかの型の絵が描かれていた。

視線を感じて見れば何か戸惑ったようなルド様の眼とぶつかった。フィアが小首をかしげると視線を逸らせて今日の講義が終わった事を告げられる。

「はい。ありがとうございました疲れはしましたが、身体を動かすのってとても気持ちがいいです。また次も宜しくお願い致します」

「あぁ……。また次の時間に」

そうして初めての剣の講義は終りを告げた。

※　　※　　※

助けを求めようとして周りに誰もいない事に気づく。ぐったりとした少女は自分の腕の中でその白く細い首に不似合いな黒い痣を拵えて、その瞳は空虚なまま空を映していた。
これは、いつもの夢だろうか？狂気の悪夢の？違うと言う事は頬を撫でる風と自分の噛み締めた唇の痛みが告げていた。

———記憶がない……。

いつものように完全に欠如したそれ。その間の行為がこれだというのか？そうだとしたら自分が何人もの少女を殺してきたのか。そう思った瞬間、あまりのおぞましさに『彼』は道端で吐きそうになった。
助けを求めなければならない。仲間に友に。でもなんと言えば良いのだろう？今世間を騒がせている少女を殺す魔物が自分であると？でもそうせねばならなかった。自分を蝕む狂気の主を例え自分の命をかけたとしても止めなければならないのだ。そう思った瞬間、心臓をゾロリと冷たい手で触られた感じがした。思わず息を詰め膝をつく。

———もう遅い。

唐突にそんな考えが頭をよぎる。『彼』は死神の嘲笑う声を聞いた気がした。

目覚めたモノ（後書き）

体調不良で更新ストップしておりました。ゆっくりな更新になると思いますが宜しくお願い致します。

心のありか

爆炎が舞った。自分は彼女に手を伸ばす。狂おしく求めて名を呼ぶ……。なのに彼女は嫌々と首を振ってこちらには来ない。この場にいるのは二人だけ。だってそうなるように殺したから。リルアーナ。アーナ。愛している。君を君だけを。なのに何故君はこの手を取らないのか。あいつはもういない。

僕等の邪魔をするルドヴェインはもう死んだ。あぁ君は美しい。泣いている顔も、怒っている顔もすべて僕だけのものだ。アーナ。アーナあいしている。なのに……何故君はそんな目で僕を見るんだ？狂おしく求めるこの僕に何が足りないと言うんだ！！！ルドは君を妹のようにしか思ってなかった！！

僕こそが夫として君を愛し、幸せにできると言うのに。君の蜂蜜色の髪が乱れる。藍色の瞳が信じられないと言うかのように見開かれた。桜色の唇から零れるのはかすれたコエ。

———それでも、私はルドを愛していたわ！あなたではなく彼を！！！エルク、私はあなたの想いに答えられない。

そう叫ぶ君のコエ。僕はそんな言葉を聞きたかった訳ではない。ルドが死んだだけでは駄目なのか……。君の心の中の奴を殺すまで？それならいっそ君を壊して僕だけの人形にしてしまおう。そうすれば、二人ずっと一緒に愛し合える。

夢から覚めて、僕は自分を取り戻した。この身体を掌握するのに随分時間がかかってしまったようだ。

記憶も随分と混乱していたようだがもう大丈夫。待っていて。僕は君を手に入れる。

※　　※　　※

何か怖ろしい夢を見ていた気がしてフィアは突然目を覚ました。乱れた呼吸が速い。つたい落ちた冷や汗が夜着の着心地をあまり良くない物にしていた。一瞬の混乱の後、フィアは自分が誰であるかを思い出してほうっと息を吐く。記憶を失ってから続く一人きりの儀式。おかしなもので自分がフィアであると言う事にはまだ慣れない。フィアは絹のローブを羽織るとまだ月の輝くバルコニーにそっと足を踏み出した。嫌な夢の余韻なのかまだ胸がドキドキと鼓動を刻み、形のない不安がドロドロと心を苛む。そんな孤独を一人で抱えていたときだった。

「大丈夫か？」

ここで聞こえるはずのない声を聞いてフィアは思わず顔を上げた。見れば目の前の大木に登ってルドが目の前にきていた。

「……ルド様……」

「すまん。びっくりさせたか？巡回中だったんだが、随分元気がなさそうに見えたんでな。久しぶりに登ってみた」

そう言いながら、ルドは反動をつけてバルコニーに上がる。

「久ぶり、ですか？」

「あぁ。昔良くラーダと手土産を持ってあの木から登って来てたん

だ。もっと早い時間だったけどな。それでもお前は『こんな時間に何てものもってくるのよ』って怒ってたけど」

「そんな怒られるような一体、何を持ってきたんです？」

「菓子。しかも大量」

「まぁ……。ふふふ」

吃驚した事も先程の不安も忘れてフィアは笑った。ルドはいつでもフィアが欲しい言葉をくれる。

「それでいて一番多く食べてたな」

ルドがそう言ってちょいちょいと手を差し出す。フィアはその手から小瓶を受け取った。中には砂糖飴で造られた小さな花が沢山入っている。

「可愛い」

「笑うなよ？俺の夜食だ。落ち込んだりするとき女には甘いもんがいいんだろ？それやるよ」

「え？」

照れたようにそう言う顔が初々しい。先程とは違う可笑しな動悸にフィアは頬を赤らめた。そう言い残してルドは来た時と同じように身軽に木を伝って降りていく。あっという間に下まで行くと片手を挙げて手を振り巡回に戻って行った。

――どうしよう……。

フィアは手を振り返してからずるずるとバルコニーに座り込んだ。

――どうしよう……。私……ルド様が好きなのだわ……。

いつでも自分が一人で居たくない時に傍にいてくれる人。欲しい言葉を言ってくれる人。自覚をすればそれはストンと胸に落ちた。けど……。

――私にはラーダ様がいるのに……。

途方に暮れてフィアはそのまま小瓶を見つめた。

※　※　※

「ラドクリフ様の行方がわからない」

そう告げられたのはまだ空が白み始めた頃だった。仮眠をとっていた所をラーダに叩き起こされ最初、ルドの機嫌は最悪だったのだがそれを吹き飛ばすほどの事件が起こったのだと悟った。

「先程、王妃殿下や他の精霊術士に助けを求める水の精霊が飛ばされた。水の精霊は用件を告げる事さえ適わずに霧散。先触れにやった使い魔の情報によると賢者の塔にラドクリフ様の姿は見えず酷い惨状らしい。一緒に来てくれ」

「……行こう。ヴェンには？」

「他のものが報せに行っている」

「わかった」

そう言うとルドは素早く鎧を身につけ剣を腰に下げた。

※　　※　　※

塔の惨状は凄惨を極めた。まるで何かと戦ったようなその爪痕は壁に床に天井に刻み込まれている。壁に飛び散った血が、敵のものかラドクリフのものかもわからない。先に到着したルドとラーダは部屋を見渡して思わず唸る。

「ここで戦ったんだね」

「おそらくな。そして不利な状況に陥って助けを求めた、というのが妥当だろう」

割れた鏡。なぎ倒された本棚。人の力だけではどうにもできないであろう何かの爪痕。それらがラドクリフの普段整然と整理された部屋に刻み込まれていた。完全なる暴力の跡。不可思議な事にそれは部屋の中だけで、塔の階段にはいっさい傷一つない。

「ラドクリフ様程の精霊術士が……この惨状か？」

「……信じたくないね。賢者の名はそんなに軽いものじゃない。それよりおかしいと思わないかい？階段には傷が無かった」

「つまり、最初は争って無かったってことか……」

「そう。少なくとも明け方に訪れて拒否できない、もしくは拒否しない者って事だ」

「親しい者ってことか？」

「それも、視野にいれるべきだね」

そう言いながらラーダは視線を床に落とす。ラドクリフが大事にしていた鉢植えの花が無残に踏みにじられている様子に深いため息を吐いた。

「遅くなったね。状況はどうだい？」

そう言って入って来たのはヴェンだ。

「悪いな。ラドクリフ様の行方も分からん」

「母上にお力を貸して頂いて精霊に言葉を紡いで貰おうとしたんだが、叶わなかった。今、ここは精霊が寄り付けないほど穢れているらしい」

「まさか！賢者の塔は聖域のはず……！」

ラーダの叫びにヴェンが重々しく頷く。

「ラドクリフ様が報せの精霊を送れたのも奇跡に近いらしい。」

「じゃあ、その霧散した精霊のみがすべてを語れた唯一のモノって事か」

「そうだ。塔は暫くの間封印することになったよ。周囲の精霊に悪影響を及ぼすからね。残りの四方の賢者様が集まり次第、母上がラドクリフ様の名代を勤め浄化する事となるはずだ」

ヴェンの言葉にルドとラーダが重々しく息を吐いた。

「ラドクリフ様は……」

「この状況では生存は難しいかもな。遺体が無いのはおかしいが……生きておられればあの人なら必ず連絡を寄こす。王妃殿下に心配をかけたままって言うのはあの方に出来る事じゃない」

「あぁ……しかし、敵に連れ去られたという事も考えられる。魔術士、騎士団共に少数精鋭を選りすぐり追跡に当てるように。後は城下町の件もあるからね。警戒のレベルを上げよう」

疲れたような沈黙が辺りに落ちる。だが、現状で出来る事はそれぐらいしかなかった。

※　　※　　※

ラドクリフが発見される事はなく一夜明けて死体が一つ増えていた。夕方になっても帰って来なかった少女は次の日の朝橋の下に隠されるようにして発見された。今までと違ったのはそこで、ただ道端に放置されていた遺体が隠されていたのは初めてだった。少女の名はエリーシャ。一週間前に15才になったばかりの少女である。そして彼女が最後の犠牲者となった。それは不気味にも唐突にその姿を消したのだ。

心のありか（後書き）

やっと恋愛ぽくなってきました。まだ微妙な三角ですが、
これから複雑な四角になる予定。いつ四角になるんだろう……。

夢の狭間

身体は手に入れた。アーナを取り戻すための大事な器だ。さぁ、再び異界への扉を開いてアーナを救い出すのだ。器はアレにしようと決めた。年の頃も丁度いいし、あの色が一番アーナに似ている。そうすれば永遠に君は僕のもの。

※　　※　　※

フィアの様子がおかしい。急に落ち込む事が多くなった。講義にも身が入らなくなり些細なミスが多くなる。皆で理由を問いただしてみても「ごめんなさい……大丈夫です」としか言わない。思い当たる節は誰にもなく、理由を聞こうと俺は城の巡回の途中や休憩時間に例の庭園の泉の畔で彼女を待った。落ち込めばそこに来ると思っていたから……でもフィアが来る事はない。そんなに誰にも知られたくないような事なのか。俺にも？そう思うと心に鉛をのみ込んだようだった。妹のように思っていた彼女に頼りにされないのが意外と堪えるらしい。ふと、ラーダと婚約する前のフィアの言葉を思い出した。

『私はルドが好き。でもあなたは夢の中に出てくる女の人が好きなのよね？ラーダはずっと私の事を好きでいてくれるって。私があなたの事を忘れるまで待ってくれるって。馬鹿よね？でもそんなラーダ嫌いじゃないんだ』

最初で最後の告白。自分は『妹にしか見れない』と言った後だった。

時々夢に出てくる女(ひと)に幼いころから恋心を抱いて、自分は一生独り身で過ごすんだと思っていた。顔だって良く見えない、儚く微笑んでいるというのだけがわかる彼女(かのひと)はフィアに良く似た色をしていたが別人だと解っていた。名前も知らない。きっと前の世で愛した女(ひと)なのだと自分で勝手に理解して。

それなのに最近のフィアに彼女が重なる時がある。記憶が無くなったせいでお転婆な所が鳴りを潜めたからだと言うのは重々理解していたけれど……。彼女はいないのに、彼女がここにいてくれたらという願望が顔を覗かせて苦しくなる。

だから本当はフィアと距離を置きたかった。でも、それよりも心配する気持ちの方が上回る。今日こそは理由を聞こうと決めた。待っているだけでは時間が過ぎるだけだ。自分からあいに行こうとそう考えて。

※　※　※

心の想いをどうしようもないままフィアは一日を過ごしていた。今日のラーダの講義でも失敗だらけで……もう少しでシア姉様の自慢の髪を焦がす所だったのだ。最近ずっと思う事はどうすればこの想いを無かった事に出来るかどうかだった。しかし考えても考えてもルドが好きだと言う気持ちに蓋を出来そうもない。一旦自覚してしまえば坂を転がり落ちるかのようだった。

何よりラーダに対して申し訳ない。そんな罪悪感がフィアを押しつぶしそうだった。最近は夕食もあまり喉を通らず、睡眠もままならない。皆に心配しかかけていない自分。薄暗くなったバルコニーでフィアはため息を吐いた。

「何を悩んでるんだ？」

その声は紛れもなくこの件の元凶で……。フィアは思わず逃げようと身をひるがえした。

「待てよ！」

ルドがとっさに掴んだフィアの手が空に舞う。

「……あっ」

撥ね退けられたのだと解ればお互い言葉なく立ちすくんだ。

「あ……の申し訳ありません」

下を向いてドレスの裾を握りしめたフィアがか細い声でそう告げた。

「俺こそ済まない。その、おどろかせた……」

ルドはそう言いながら片膝をついてフィアの顔を覗き込む。その顔はいつか見たときのように涙に濡れていた。

「なぁ、フィア。皆心配してる。それはわかるだろう？」

「……はい」

「お前がそんなに落ち込む理由を教えてくれ。庭の木にもいえないのか？」

「い……言えません。誰にも言っちゃいけないんです」

ぽろぽろと涙が頬を伝って落ちる。ルドは困惑気味に立ち上がるとフィアを引き寄せて幼子にするように背中をそっと叩いてやった。フィアは一瞬ビクリとなったが今度は逃げようとしない。

「誰かに酷い事されたか？」

「いいえ」

「じゃあ、誰かに秘密にしてほしいって言われたとか」

「いいえ」

居心地の良い腕の中で暴れる心臓を落ち着かせながらフィアは答える。

「じゃあ何で言っちゃだめなんていうんだ？言った方が楽になるかもしれないぞ？」

「これは……私だけの問題なんです。私が一人で答えを出さなきゃならないの」

「絶対に？」

「絶対に……時間を下さい。ちゃんと元気になりますから」

そう懇願されてはもうどうしようもなかった。

「分かった。皆にもそう言っておく時間が欲しいってフィアが言ってたってな」

「はい」

ぽんぽんと頭をなでられフィアはルドにとって自分は妹のようなものでしかないのだと自分に言い聞かせる。それでも離れていくルドの体温が恋しかった。

※　　※　　※

夕方、彼女の事を思い出した所為かルドは久しぶりに彼女の夢を見た――――

蜂蜜色の髪に藍色の瞳。優しく微笑んでいるであろう彼女。

『※※』

呼ばれ慣れているはずのその自分の名がいつも聞こえない。耳に届いた瞬間、解れてなんの意味もなさないものになる。白い花咲く丘の上、彼女は髪を靡かせながら俺のほうに向かって来るのだ。

その時俺の心にあるのはただ愛しいと思う気持ちだけ……。

幼い時からそれが恋だと知っていた。大人になってからはそれが愛だと。でも、彼女はここにはいない。きっと世界のどこを探しても。

そう思うと心が痛んだ。もしも神がいるのなら俺の夢から彼女をこの世界に……。

夢の狭間（後書き）

ルドの初恋は夢の中の人でした。
これからフィアの記憶にじょじょに近づきます。

堕ちたるもの

ゴォーン

ゴォーン

ゴォーン

不安の色を乗せた鐘の音が響く……。それは来るべき時の予兆のようで……。

※　　※　　※

ボロボロになった男が城門へと近づいてくる。門衛が二人、緊張した面持ちでその男を迎えた。

「驚かせてすみません。私です」

男はボロボロのローブを頭からはずすと門衛達に顔をあらわにした。

「ラドクリフ様！ご無事だったのですね？しかし、それは……」

門衛に呼びとめられてラドクリフは力ない笑みを浮かべた。

「他言無用に願います。……触れてはなりません。この呪詛は強力過ぎて君にも災いを及ぼしかねない」

崩れ落ちかけたラドクリフを支えようとした門衛に慌てて世話は要らぬと返す。

「私は一刻も早く事の顛末を陛下に伝えねばなりません。ここを通してもらえますね？」

「はっ。ラドクリフ様ともあろうお方がそのような事をお気になさいますな。妃殿下と御兄妹のように育ってきたあなたです。何を止める事がありましょうか」

「済みません。本来なら先触れがあってしかるべきなのですけどね……事は一刻を争うもので」

そう言うとラドクリフはローブをかぶりなおし城内へと消えていった。

※　※　※

ドアのあけ放たれたフィアの部屋でラーダは彼女と向かい合っていた。

「フィア……、その、君が今そっといしておいて欲しいって言うのは聞いたんだ。でもできたらそういう話は僕にしてほしいな、なんて……ごめん……」

フィアが泣きそうな顔をしているのに気付いてラーダは思わず小さな嫉妬心をフィアにぶつけてしまった事を後悔した。最近夢見が悪

いせいかどうも些細な事でイライラしがちだ。フィアはラーダの婚約者であるはずなのに、記憶を失ってしまったせいかそこがどうも心許ない。

「いえ、ごめんなさいラーダ様。最近自分でもどうかしてるって思うんです。でも感情が制御できなくて……」

済みませんとただ謝るフィアに、罪悪感がより募る。

「いや、君は悪くない。僕がつまらない事を言ったのが悪いんだ。顔をあげて？今日は君に渡すものがあって来たんだ」

そう言ってラーダは小さな宝石箱を取り出した。

「アミュレットだ。フィアが着けやすいようにネックレスにしてみた」

そうしてラーダと同じ目の色、新緑の石が嵌った蝶々のネックレスを取り出す。石は一級品。でもごてごてしたものではない、シンプルでいて良く見れば値が張るものとわかるその品。

「綺麗……でもいいんですか？」

困惑した表情でフィアが言う。

「いいも何も君のために作ったものだから。是非つけてほしいね。髪をあげてくれる？」

「はい」

ラーダはフィアの後ろに回ってその蜂蜜色の髪が波打ちながら上へあがるのを堪能するとそっとネックレスをフィアの首にかけた。かきあげられた髪からフィアの甘い香りがしてラーダの思考を麻痺させる。フィアの白い項にキスを落としてラーダはそっと離れた。

「ラーダ様?!」

「はは、ごめん。美味しそうだったからつい」

顔を真っ赤に染めるフィアが可愛くて、抱きしめたくなる衝動を抑えながらラーダはこの一時の幸せを噛み締めた。

「じゃあ、僕は行かないと。一時でも君と過ごせて良かった。もし何かあったらいつでも言って。すぐに駆けつけるから」

「はい……あの、有難うございます」

戸惑いがちに言うフィアにラーダは寂しそうに微笑みながらこの場を後にした。

※　　※　　※

ラーダの行動に驚いたフィアはこっそり庭の泉に来ていた。言われた言葉にもドキリとしたが帰りがけの寂しそうな笑顔が頭からはなれない。

――――私、ラーダ様を傷つけてしまったんだわ。

申し訳ない気持ちで一杯になってフィアは一人涙を零した。
ラーダに、自分のルドへの気持ちが見透かされたようで心が痛む。
―――早くこの気持ちを終わりにしないと……。
自分を妹のようにしか見ていないルドにも記憶を失った婚約者にも愛情を注いでくれるラーダにも申し訳がたたない。でも、諦めようとすればするほど、その思いは強く確かになってしまうのだった。
「フィア？大丈夫か？？」
そんなときにかかる声はいつもの落ち着いたもので……。
「ルド様……？」
どうしてこの人は、一人でいるのがつらい時に現れるのだろう？
「……あぁ、それ貰ったんだな。似合ってる」
「アミュレット……ですか？」
「俺がすすめたんだ。アミュレット持たせといたほうがいいだろうって」
―――ラーダ様の瞳と同じ色のアミュレットを……？
そんな些細なことに傷ついて泣きそうになる自分が嫌だった。
「？どうした……？気に入らなかったのか？」

「いいえ……とっても綺麗」

やっとそう言ってルドから視線を逸らす。

「あぁ、あいつらしいデザインだな」

そう言ってフィアにルドが近づいた時だった――――。

「おや、……探す手間が省けたようだ」

その声に二人が振り向くと――――。

「ラドクリフ様……？」

ボロボロのローブを着たラドクリフがそこに立っていた。

「ご無事……だったのですか。その姿は？」

ボロボロの姿なのに、にこにこと笑うラドクリフに異様な感じを受けながらルドが前に出る。

気付けばカチカチと震えるフィアが後ろにいて……。

「あなたは……ダレ？」

「おや？わかりますか？女性の勘はあなどれませんねぇ」

スッと口元に持って行かれた手は異様に黒く、その手を一振りする

と、ボロボロだったローブが美しい漆黒の法依にかわる。

「我が名はエルク・ラスタ・ウルデューク」

ゴォーン

ゴォーン

ゴォーン

不安の色をのせた鐘が響く。エルクと名乗った男と目があった瞬間――。

フィアの目の前で爆炎が舞った。男がフィアに手を伸ばす。フィアは嫌々と後じさりそして――。

「嫌ぁっ」

「おい、フィアっどうしたっ？」

「可笑しな方だ。その目に何が見えたのですか？」

そこには爆炎などなく先程と変わらぬ庭があるだけで……。

「あ……」

抱きしめてくれるルドにしがみつきながらエルクと名乗った男を見つめる。

「ふふ。その怯えた瞳。益々、彼女を手にするための器に相応しい。

……あの時殺してしまわなくて本当に良かった」

「な、まさかあなたがフィアを？嫌、貴様エルクと名乗ったな。その姿はどういう事だ」

「貴様がラドクリフと呼んだ男の事か？彼ならもうこの世にはいない。僕が食べてしまったからね。ただ、賢者というだけあってなかなか私を受け入れてくれなくてね。器を掌握するまでに記憶が曖昧になったりして大変だったよ」

「一体、いつから……」

「ふふ。調査団があの森に入った時からだよ。彼もまた報われない想いを胸に抱き続けてたからね。共鳴するのに時間はかからなかった」

「そんな……」

「さぁ、お話はおしまいだ。フィア様？あなたの身体を貰います。僕の愛しい彼女を手に入れるために」

エルクはそういうと虚空から禍々しき黒杖を取り出して一人嗤った。

おぼろげなる我が身

「ライガ・ピント・ティアレス」

精霊術士であったラドクリフには使えようもない魔法がその唇から迸る。と、小さな雷が大地を抉った。ルドはフィアを庇いながら後ろにさがる。

「ラシルディア」

ルドは腰の剣を逆手に構え、柄頭の疑似宝珠（オプトル）を掲げるとシールドの呪文を唱えた。薄く輝く光の幕が二人を包み雷が弾ける。

「あまり、抵抗しないで欲しいのですがね。フィア姫の身体に傷は付けたくない」

「冗談だろう。おいそれとフィアに傷を付けさせる気もないが、貴様にくれてやる気もない！」

「ふん。君の顔は僕のもっとも嫌いな男に良く似ている……苦しみの中で殺して差し上げましょう」

瞳に狂気と憎しみを湛えてエルクが更に呪文を唱えた。

「深淵に落ちるがいい……。ディプリス」

ルドの足元に黒円ができる。その中からギチギチと音を立てて口だけの黒い魔物が何匹も現れる。

「ルド様っ！！」

「ぐわっ」

禁術とされる類の暗黒魔法だ。慌ててフィアがルドを引っ張るが、左足がズタズタに引き裂かれた。

「全身喰らい尽くされてしまえば良かったのに。残念ですね」

「あなたは！自分が何をなさっているのか分かっているのですか？！こんな酷い……」

ルドを抱きかかえたフィアが涙交じりに問う。

「お優しい姫様。僕にはあなたもその男もどうでもいいんです。僕のアーナさえ手にはいればね」

「そんなことっ！そのアーナさんがこんな事で喜ぶとでも？」

「喜びはしないでしょうねぇ。でも構わない」

嗤うエルクに怖れを感じながらフィアは震えた。

「あなたは……その方を愛してるのではないのですか？」

「？愛してますよ？そしてこの世で一番憎んでいます」

「っ……！」

「フィア、そんな奴にまともに話しかけるな。結局この男は自分しか愛してないんだ。独りよがりの子供の我儘みたいにな」

「あなたに言われる筋合いはない。顔だけでなく、性格まで腹立たしい男だ……ライガ・ピント・ティアレス」

エルクはそう言うとルドの左足を狙って雷を放つ。

「ぐあぁっ」

落ちた雷に焼かれルドの黒く焦げた左足が異臭を放つ。
顔色を失ったフィアが息をのんでエルクを睨んだ。

「いい顔だ。あなたの顔は憎しみを孕んでいても美しい。さぁ、姫この男を苦しませて殺したらあなたは私と共に行くしかない。記憶喪失で大変助かりました。魔法が使えればこの苦境を切り抜けられたかも知れないですからね？」

こんな事をしているとも思えない爽やかな笑みを浮かべてエルクが言う。その言葉にフィアは唇を噛んだ。ここに杖もなく、何もできないわが身が悔しい。

「あぁ、他の助けは期待しない事です。ここは城の裏手。あなた方を見つけた時に私が結界を張りました。ここの騒ぎは誰も気づかないし、ここに来れたとしても中に入れません。……時間を稼ごうとしていたみたいですが残念ですね」

「くそっ」

ルドが舌打ちすると剣にすがって無理やり身体をおこす。

「大した精神力ですねぇ……ゴキブリ並みの。その状態で立ちますか。流石は護衛騎士団長というところですかね。相当の痛みがあるはずですけど。けなげな話だ。自分が囮にでもなって姫君を助けようとでも？」

「はっ。俺はまだ戦える。それだけだ。確かに痛みはあるが、あんたの雷のお陰で出血は止まったからな。神経は繋がってるんだ足は動く」

言葉の威勢はいいが額に浮かんだ脂汗が痛みが酷い事を窺わせる。そんなルドを見てフィアは決心したように言葉を発した。

「もうやめて下さいっ！私が一緒に行けばルド様を助けて頂けますか？」

ルドの前に庇うように立ち、フィアが言う。

「なっ！馬鹿フィアっさがれ！！」

ルドが慌てて前に出ようとするがままならない。

「そうしてあげたいのは山々ですが彼は少々私の勘に触る。顔と言い、呼び名といい、性格といい、どれ一つとしてこの世に存在する事を看過できないのです。可哀想ですが、これも定めと思って死んで貰おうと思います」

そんな、と唇を震わせますます、血の気を失っていくフィアに対し、あははと笑ってエルクが黒杖を掲げる———。

「ウィルダ・ドゥ・レース」

ルドがフィアを庇う事を見越してエルクは攻撃魔法を放つ。風の魔法がフィアを抱え込んでかばったルドの全身を切り裂いた。血しぶきが辺りに舞う。

「いやあっ！！！」

フィアがさけんだ瞬間光が弾けた。

パキンッ

音を立てて結界が崩れ落ちる。

「ははははっ。この力はっ！……アーナと同じ。ますますもってその身体、器に相応しいっ」

しゅうしゅうと煙をあげてエルクが叫ぶ。その身体は光に焼かれたようにボロボロになっていた。

「ふふふ。面白い。とはいえ今ので援軍が来てしまいますね。今日の機会を逸してしまうのは残念ですが、私の身体も回復が必要だ。あなたの身体を手に入れるのはまたの機会に」

そう言うと、エルクは自身の影に埋もれて消えた。

「ルド様っ」

ぐったりした様子のルドにフィアが縋り付く。

「大、丈夫だ。済まん。怖い思いをさせたな」

「そんなことといいんです。あぁ、どうしよう血が……」

ダラダラと流れ落ちる血にフィアが泣きそうな顔になる。傷が多すぎて何処の血も止められない。首に至っては動脈を損傷したようで勢いよく出る血がフィアのドレスを赤く染める。

「私のせいですっ……私の」

「フィアの所為じゃないさ。これもまた俺の運命だったんだ。気にするな」

援軍が来るまで持ちそうもないと悟ったルドが慰めるようにフィアに笑いかける。

「いやっ！そんなことおっしゃらないで下さい……私……いやです、そんなの！！」

———アレイズ・ディラムザ

まるでその思いに応えるようにフィアの脳裏にこの言葉が浮かぶ。何かに突き動かされるようにフィアはその呪文を唱えた。

「アレイズ・ディラムザっ！」

優しい、暖かな光がルドを包んだ。するとみるみるルドの傷がふさがっていく。左あしですら引き攣れた後を微かに残して完治した。

「あ……私？」

自分のしたことに驚いたフィアが自分の手を見る。そんなフィアをよそにルドが目を見張って凍りついていた。

「馬鹿な……。――――君は誰だ？」

フィアに茫然としたルドが囁くようにかけた声は信じられないもので――――。

「え？」

ルドを助けられた事で笑顔になっていたフィアが唖然とした顔で聞き返す。

「フィアは回復の呪文を使えない。生まれつきの魂の欠陥なんだ。だがいまのは……」

「そんな、私ただ夢中で」

ルドから聞かされる言葉がフィアの心を抉っていった。自分が誰かなんて記憶を失っているフィアには分かりようもない。けれど。魂の欠陥は転生するたびついて回る。フィアが回復魔法を使えないのであったのならこの先も、使えようがないのだ。その言葉に形のない不安がフィアの心を震わせる。

「っ。済まない。こんなこと言って。だが……」

ルドが何か言いかけた所でラーダの声が聞こえた。

「今のはなんだっ？……おいっ無事か？！」

血まみれの二人にラーダが息をのむ。

「フィアっ」

「無事だ。フィアのドレスの血は俺のだ。俺の傷は……俺の持ってた魔導石で治した」

明らかに嘘を吐いたルドにフィアの肩がピクンと震える。

「じゃあ、二人とも無事なんだな？一体何があったんだ？」

「長い話になるぞ。陛下にも報告しなかれば。……フィアは今回の事でショックを受けてる。俺の血で汚れてるし風呂に入らせて、落ち着けるようにしてやったほうがいい。俺は着替えてから陛下に取り次ぎを頼むからお前はフィアを部屋に送ってやれ」

「あ、ああ。じゃあフィア行こうか」

振り向かないルドの背中を見送ってフィアはラーダの手を取って立ちあがった。頭の中はまだぐるぐるとさっきの言葉を繰り返している。

———君は誰だ？———……私は誰？

ラーダが気遣って何か話しかけていたが、今のフィアの心には届かなかった。

おぼろげなる我が身（後書き）

相変わらず、可哀想なラーダさん。フィアに偽フィア（？）疑惑浮上。

器と魂と

「なんという事だ……まさかラドクリフが……レダにはとても言えんな」

そう呟いたのは陛下で、一気に老けこんだかのように見えた。ここは陛下の執務室。夜遅くではあるが
ラーダ、そしてヴェンと陛下がこの場でルドの報告を聞かされた後だった。皆一様に青い顔をして押し黙っている。

「陛下。アレはもうラドクリフ様ではありません。エルクと名乗った奴はラドクリフ様を喰った、と」

「分かっている。……ラドクリフ……。私は盟友(とも)を失ったのだな。そのエルクと名乗ったものの素性、調べねばならんな」

「それですが、陛下。私に思い当たる人物が……、俄かには信じられないのですが……」

「よい。ラーダリオ、申してみよ」

「は。私は学生の時３００年前のあの惨劇を調べていた事があるのですが、移動要塞ルーヴェルガに乗員していたウルデューク卿の名がエルクであったかと。それであれば、アーナと呼ばれた女性は第３王女のリルアーナ姫ではないかと思うのです。何故今になってこんな事が起こったのかは分かりませんが彼の地から事が始まったと思えば可能性はあります」

真剣に訴えるラーダにルドも頷いた。

「エルクと名乗った男の呪文は、先の御世に禁術にされたものもありました。可能性は高いかとあの、禍々しい黒い手……古文に出てくる闇の手のようでした」

「過去からの亡霊か……ラドクリフ様がいなくなった塔の惨状を考えると、ね。父上……このままではフィアの身が危険です。早急に対策を取らねば」

「うむ。確かに俄かには信じがたいがその可能性は高かろう。魔術でヤツの痕跡を探せ。先に打って出て仕留める。門衛の者や、城内、城下にラドクリフに謀反の疑いありと発令せよ」

「陛下！それは！！」

ルドとラーダが声をかける。

「気持ちは分かるが堪えてくれ。あのラドクリフが謀反などと言う事がありえんのは私も承知している。しかし、この話、まだ外に出すには証拠がなさすぎる。しかし、民に犠牲が出るかもしれん事態を考えるとラドクリフを悪者にするしかないのだ」

その言葉にラーダが唇を噛み締め俯く。陛下にとっても苦渋の決断だったのであろう。目を伏せた。

「……了解致しました。陛下。只今より、騎士団すべて厳戒態勢に入ります。」

そう答えたのはルドで。

「……魔術士団、同様に厳戒態勢に入ります」

ラーダもその言葉に続く。その夜はこうして更けていった。

※　　※　　※

「寝れないのか？」

まだ明けきらぬ夜のバルコニーでフィアが佇んでいると、ルドが正面の木の枝から伝って来た。

「……」

泣きはらした目を伏せフィアが俯く。

「混乱していたとはいえ、酷い事を言った……済まない」

「いえ……でも私……本当は、誰……なんでしょうか」

その優しい言葉に、フィアは思い切って口を開く。

「その事だが、もしかしたら死にかけたショックで魂の欠陥に何か奇跡が起こったのかもしれないし……」

「ウソ。ルド様ご自身でも信じてないでしょう？」

「……すまない……」

暫く二人で押し黙っていたものの、意を決したようにフィアが顔をあげる。

「私、おかしいと思ったんです、私の髪の色はこんなに濃かったかしらって。こんなに短かったかしらって。――――記憶を失ったとはいえこんなに懐かしいと思える物が無いものかしらって」

そう言ってポロポロと泣き始めたフィアをそっとルドが抱きしめた。

「済まない……あの言葉は君を傷つけるだけだったのに……俺は！」

「いいえ。いつか気付かないといけなかったんです。それでなくともきっと誰かが気付いてました」

その言葉に、ルドが苦悶の表情を見せる。抱きしめた女性はフィアの身体で中身は違う。こんな時なのに夢の女性（ひと）を思い出して混乱しそうになる頭を軽く振る。

「この事は、暫く秘密にしよう。はっきりしない状況で皆を混乱させたくない」

「……はい。本当に、どうしてこんなことになったのか……本当のフィア姫はどこにいったのでしょう？」

「わからない。ただ、その身体は間違いなくフィアのものだ。何が起こったのか一緒に考えよう」

「……はい……」

ただ、今はその言葉にすがっていくしかなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9360n/

虚空の揺籃～暁の目覚め～

2011年6月17日19時24分発行